

姫路市立美術館
研究紀要
第12号 ■ 2011年

B U L L E T I N
O F
H I M E J I
C I T Y
M U S E U M
O F
A R T

姫路市立美術館
研究紀要
第12号 ■ 2011年

B U L L E T I N
O F
H I M E J I
C I T Y
M U S E U M
O F
A R T

目 次

松岡映丘の画稿紹介 平瀬 礼太	1~18
第3回高校生学芸員展を終えて 本丸 生野	19~30
『大日本魚類画集』の「解説」の再録Ⅱ 田島 奈都子	31~81

松岡映丘の画稿紹介

平瀬 礼太

姫路市立美術館では2011年4月16日から5月29日まで「生誕130年 松岡映丘展」を開催した（その後島根県立美術館、練馬区立美術館を巡回）。やまと絵に近代性を賦与してそれを再興したという功績もさることながら、当館にとって映丘は姫路に隣接する兵庫県神崎郡福崎町に生まれ育ち、東京画壇に活躍の場を置きながらも播磨の画題に強い関心を抱きつづけた地元ゆかりの作家として重要な意味をもっている。約30年ぶりの本格的な回顧展となった今回は初期から晩年にいたるまでの代表的な作品に加え、小下絵や大下絵などの資料も展示して松岡映丘の創作活動を再検討した。30年の時を経て、新たに発見された作品もあったが、反対に所蔵先が不明のままであったもの、借用できなかったものもあったことは少々残念である。

ここでは、展覧会の作品調査中に実見することのこなかった、遺族のもとに保管され続けていた映丘の画稿類について簡単ながら紹介したいと思う。

映丘の画稿と言えば福崎町立柳田國男・松岡家記念館（以下記念館）に所蔵されている1000点を超える下絵類が知られている。これらはほとんどすべてが遺族から寄贈されたもので、兄の柳田國男、井上通泰らの資料とともに同館で保管されている。そしてこの画稿を使って1977年には西宮市大谷記念美術館で「松岡映丘画稿展」が開催されている。本紀要で紹介する画稿類は出所は同じ遺族のもとであるが、1975年に現在の記念館に寄贈された際に遺族の手元に残されたものである。どのような基準で寄贈したものと残したものを分けたのかは不明であるが、残したものは小下絵などサイズの小さいものが多い。ともかく、ここで紹介する画稿は、記念館所蔵の画稿を補足し、松岡映丘の制作過程や、創作の全体像を把握するために重要な資料であることは明らかである。紙面の都合で小さい図版のみの紹介となるが、今後少しずつでもより詳細に紹介する機会を持ちたいと考える。

主要作品の画稿についてここで簡単に触れておきたい。

「宇治の宮の姫君たち」(4) は、なかなか展覧会では評価を得られずに苦労を重ねていた映丘が1912年に文展（第6回）に初入選した記念すべき作品であるが、当初は六曲一双ではなく現在の右隻のみ文展に出品されている。この小下絵にもやはり右隻しかなく、後で左隻が追加されたことをより強く裏付けるものである。下図から忠実に本画が作られたことがわかるが、本画では男性の手にある細やかかつ鮮やかな扇の表現、琵琶の細部の表現、御簾や中央女性の衣装における色彩の変化が目立っている。

「室君」(7) は文展で特選首席となった出世作であるが、女性の表情に違いがある。能面深井（人生経験を積んだ、特に辛酸をなめた中年女性を表現する）を参照したというが、下絵はもう少しふくよかな柔かい表情に描かれている。「室君」については映丘自身の談話が残されているので引用する。

「能面深井の感じを採つて ▽松岡映丘氏談

私の郷里があひの絵になつて播州室の津の近くでして彼処の入江に立つ最も女性的な小波を以前から取り扱つて見たいと思つてゐました夫からあひの五月雨や梅雨のしとしと音も無く降る中に女性を配して見たいとの考へからあひの絵が出来上つたのですが室の遊女を能楽の三井寺や隅田川の様な悲劇物に使ふ能面深井の感じを採つて浮川竹の流れの身と云つた様な老けた女に仕たのがあひの絵の山なのです、描き始めたのは九月初めで今十日位はかゝる筈でしたのを間に合はないといふので切り上げま

した」（『東京朝日新聞』1916年10月24日）

別の談話などでは傾城をどのように上品に表すのか苦心したとも、もっとなまめかしく、こびた挑発的なものにしたかった、ともアンビヴァレントな見解を示しているが、題材の取り方、画稿と本画の差からもその微妙さが窺える。

「池田の宿」(12) は記念館下絵では腹巻（鎧の一種）をつけているが、ここでは本画と同様着衣である。ただし人物の配置や部屋の構造自体が異なり、本画では7名の人物が環状となるような位置関係と変っている。

「伊香保の沼」(14) についてもほとんど構想は変わらず、手の位置や、衣の色が変えられている。顔の表情を含めた全体の雰囲気は本画ではより妖艶なものとなっている。

「千草の丘」(16) は映丘お気に入りの女優・水谷八重子（初代）を描いた大作の掛幅であるが、これはほぼ原寸大のきもの部分のみの下絵であり、きものの柄が描かれていない記念館所蔵の下絵と合わせて見てみると、制作過程が知れて興味深い。

「富嶽茶園之図」(21) も「千草の丘」などと同様の大幅であるが、この小下図の段階でかなり構想が出来上がっていることがわかる。湾が本画や記念館の天下絵ではより内陸に入り込み、また富士の後ろの山を本画や天下絵では描いていない。本画では最終的に全般にメリハリの効いたすっきりとした構図に仕上げている。

全体を通じて見ると小下図の段階でも映丘はきちんと構想を練っている様子が窺える。歴史的考証や表現のイメージをしっかりと頭においた上で制作にかかっているのは几帳面な映丘らしい。しかし、本画が行方不明の「即興詩人」のように画稿とは帽子や髪型、服装まで変更が加えられたものもあり、今後は多くの画稿と本画を付き合わせながら、制作の過程や背景について考察し、映丘の創造の核心部分を探っていく必要があるだろう。さらに、現在所在が確認されていない多数の作品があることが今回紹介した画稿や記念館所蔵の画稿から明らかであることから、本画が少しでも新たに発見されることを切に望みたい。

注：下絵の題名については下絵自体に記されている場合、もしくは本画が明確に判明しているもののみ記載した。制作年については下絵自体に付せられている場合はその年をそのまま記載し、本画の制作年から類推したものは「～年頃」と記した。番号のみ記したものは順不同である。また1点のみ映丘の妻静乃の作品が含まれているため、最後に紹介した。

※本稿作成にあたり多大な便宜をはかっていただいた松岡映丘の御遺族に感謝の意を表します。



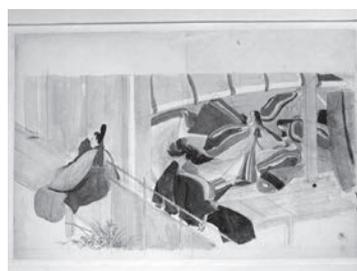
1. (武者絵) 1888年頃



2. 裸体写生 1903年



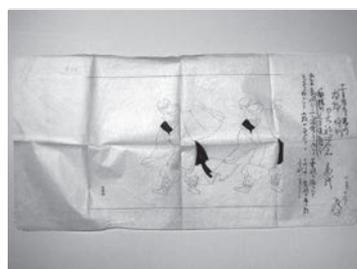
3. 題不詳 1904年



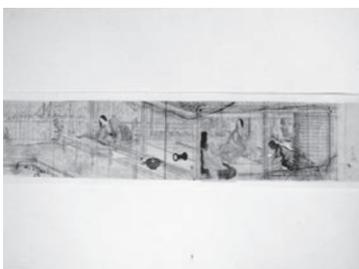
4. 宇治の宮の姫君たち 1912年頃



5. 御堂関白 (中幅) 1915年頃



6. 『太陽』増刊 御大礼記念号表紙 1915年頃



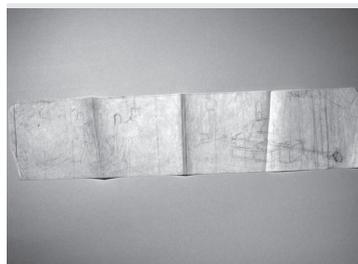
7. 室君 1916年頃



8. 春光 1916年頃



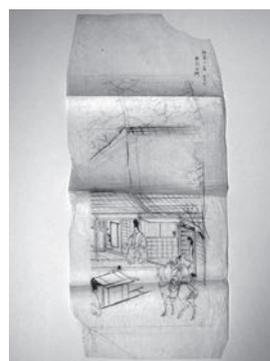
9. ねくたれ髪 1917年頃



10. 燈籠大臣 1919年頃



11. めしい 1919年頃



12. 池田の宿 1921年頃



13. 詩僧西行 (右幅) 1925年頃



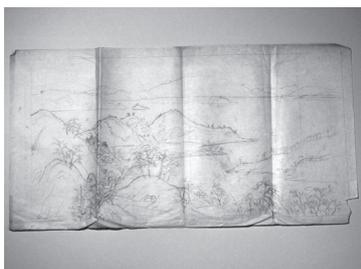
14. 伊香保の沼 1925年頃



15. 日比谷公園婦人像 1926年頃



16. 千草の丘 1926年頃



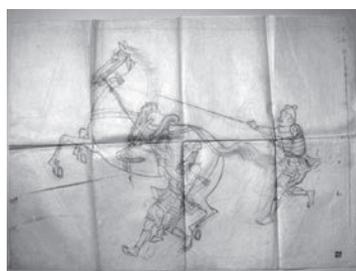
17. 気比の海 1927年頃



18. 明治神宮御影 1927年



19. まな鶴 1927年頃



20. 生暖 1927年頃



21. 富嶽茶園之図 1928年頃



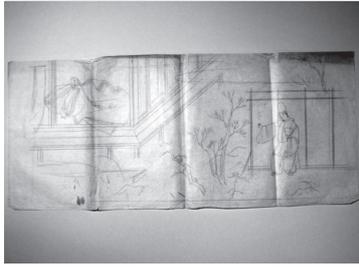
22. 湯煙 1928年頃



23. さつままつ浜村 1928年頃



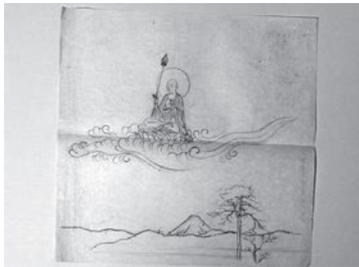
24. 即興詩人 1930年頃



25. 伊勢物語 河内かよひ 1930年頃



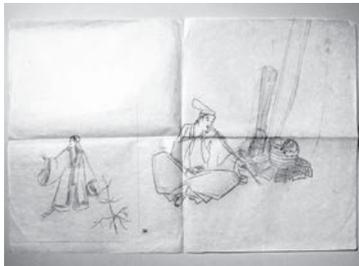
26. 鍾馗 1932年頃



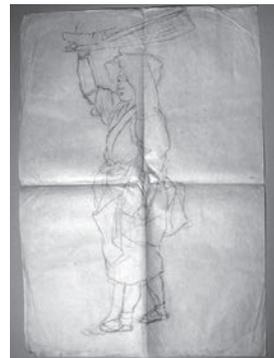
27. 地藏菩薩影向像 1933年頃



28. 安土山上の信長 1934年頃



29. 摘矢 1934年頃



30. 小原女スケッチ



31. 草紙洗



32. 五郎



33. 桃太郎



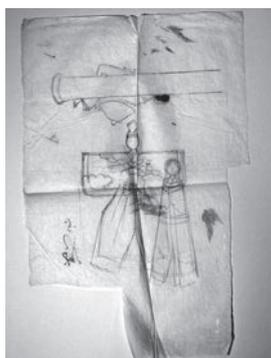
34. 八幡太郎



35. 鞍馬山



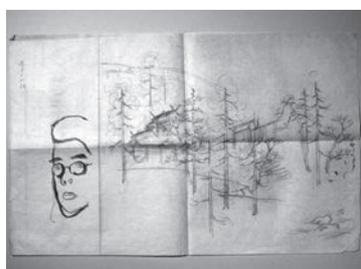
36. 和泉式部



37. 紙ひな



38. なでしこ



39. 道男の似顔 ほか



40.



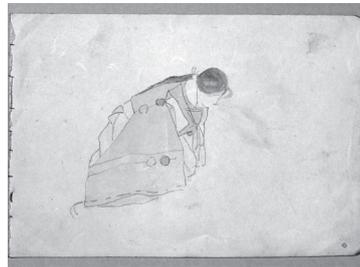
41.



42.



43.



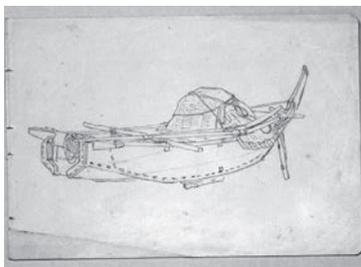
44.



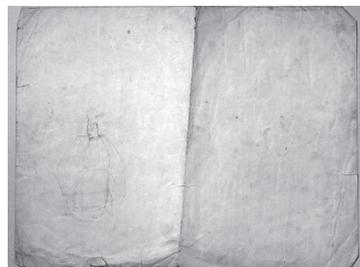
45.



46.



47.



48.



49.



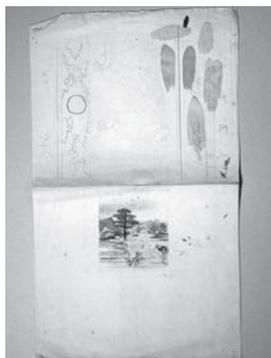
50.



51.



52.



53.



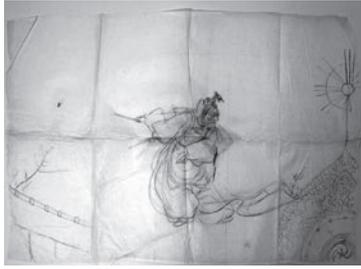
54.



55.



56.



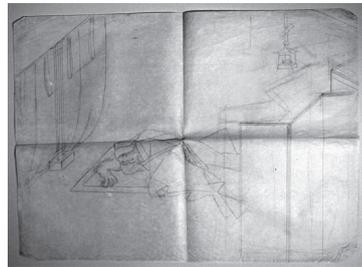
57.



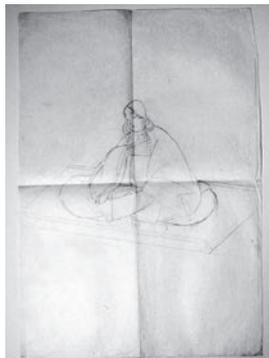
58.



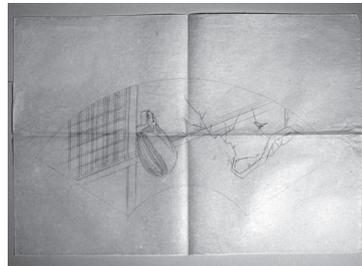
59.



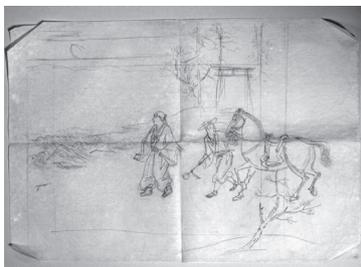
60.



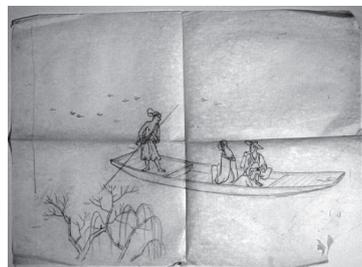
61.



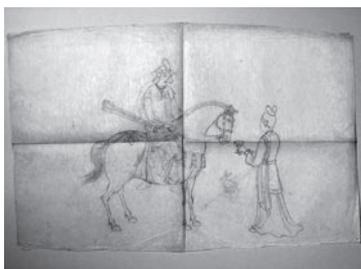
62.



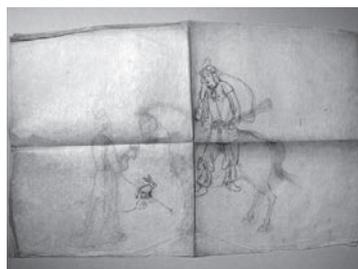
63.



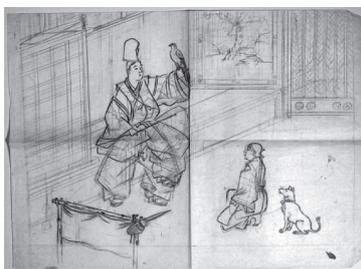
64.



65.



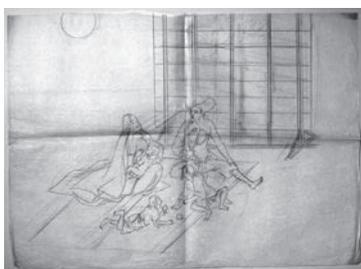
66.



67.



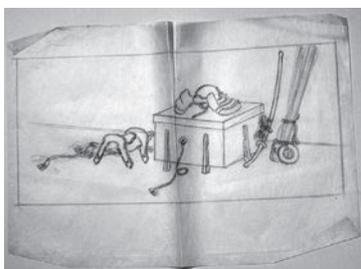
68.



69.



70.



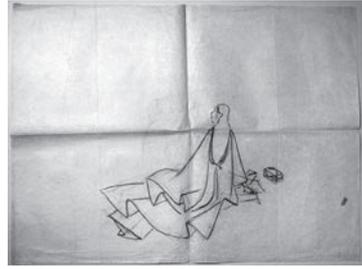
71.



72.



73.



74.



75.



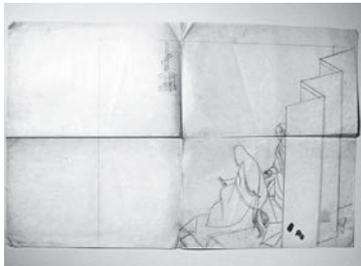
76.



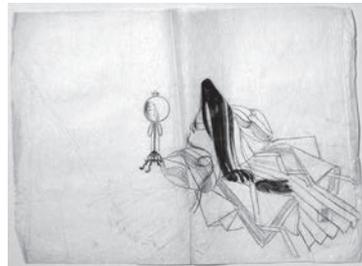
77.



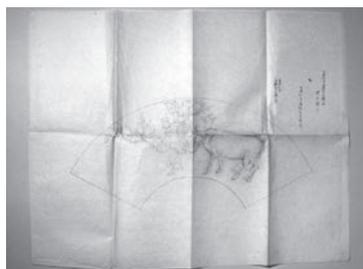
78.



79.



80.



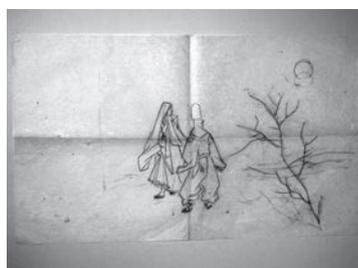
81.



82.



83.



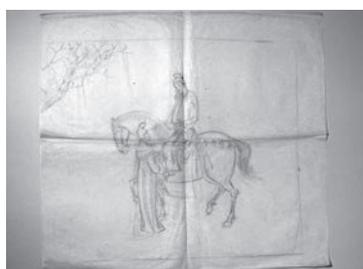
84.



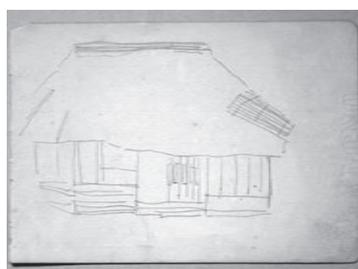
85.



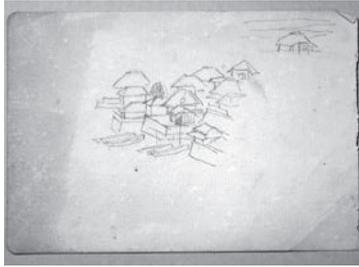
86.



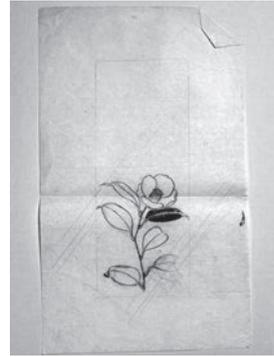
87.



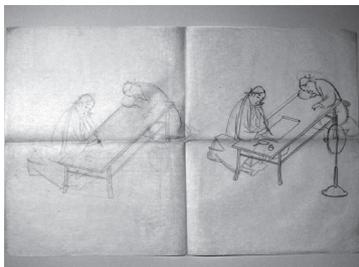
88.



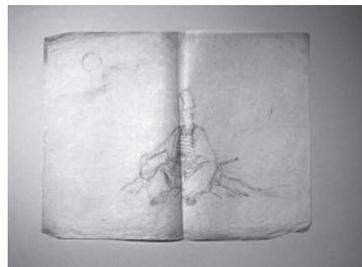
89.



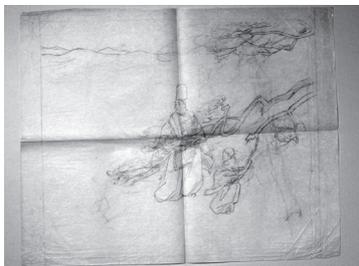
90.



91.



92.



93.



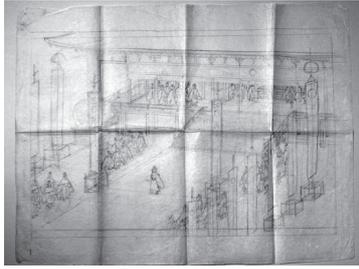
94.



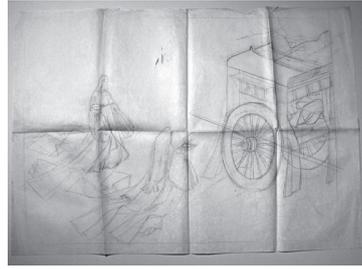
95.



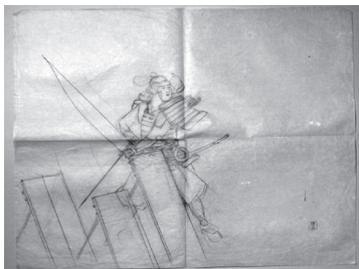
96.



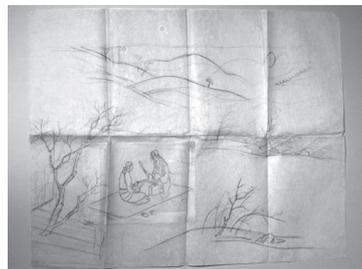
97.



98.



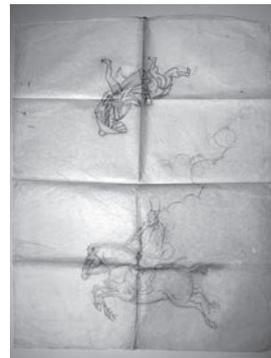
99.



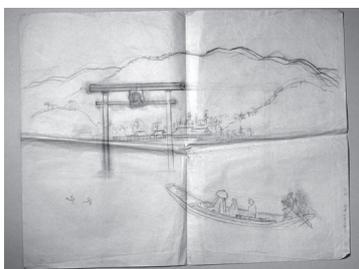
100.



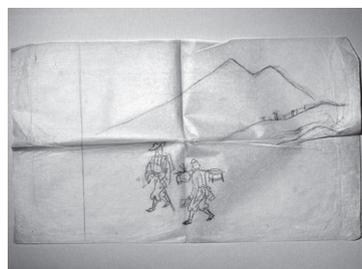
101.



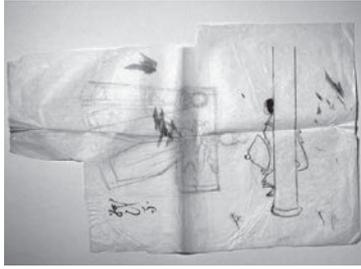
102.



103.



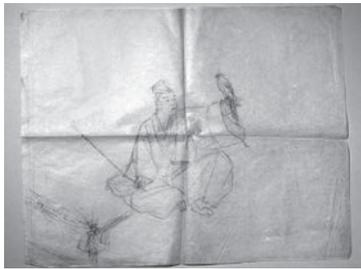
104.



105.



106.



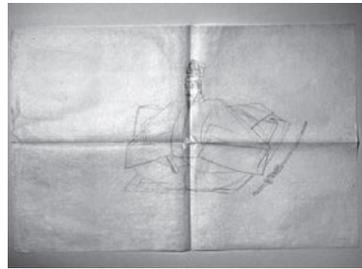
107.



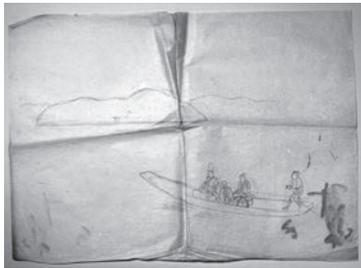
108.



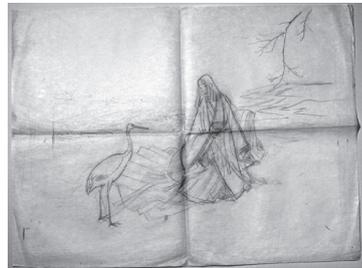
109.



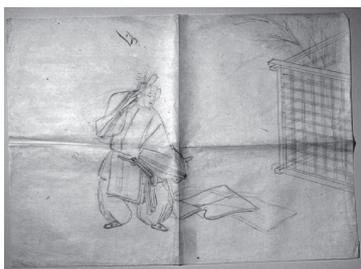
110.



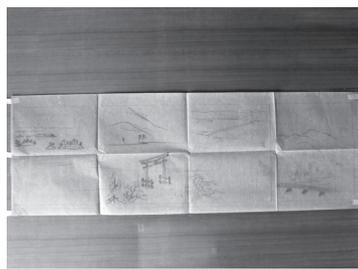
111.



112.



113.



114.



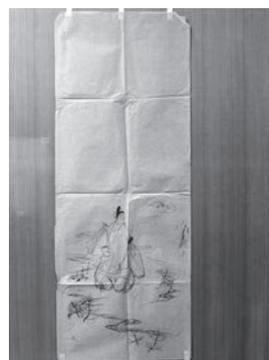
115.



116.



117.



118.



119.



120.



121. 静乃（映丘の妻）による作品